

成人式を迎えて

緒方 千恵

1, 966グラムで生まれた小さな男の子。ミルクも少量しか飲めないため間隔が短かったです。すぐ熱を出したりして体も弱かったけど手はあまりかからなかったように思います。二才を過ぎた頃、

主人が発達の遅れについて気になったことを言い出しました。私も気にはなっていたものの、認めたくないという気持ちが強かった。主人のこの発言は私にとって幸運でした。この子に発達の遅れ・障害があっても同じ方向を見て一緒に育てられると思ったからです。それでことばの遅れも含めて気になることをいろんな機関に相談に行きました。子供には、理解できなくても必ずそこに行く理由を伝えました。でもそこで言われるのは、「お母さんとの接し方を密にしてください。よく話しかけて下さい。何かあったら相談に来て下さい」いつも同じ答えが返ってきます。具体的なヒントはありません。自分達で考えてやるしかないと思いました。子供の様子を見ながら、無理なくできるように、今出来ることは何かを常に考えていきまいた。親子で楽しくできることと思いた。親しながらも時にはバトルもあったけど。



偶然、市の広報誌で見つけた「親子教室」に通うことが出来、そこ

を通して友人も出来ました。幼稚園は偶然バザーの時に立ち寄ってこんな幼稚園がいいなあと思っていた所でした。相談に行った際に「おしっこ」と園長先生。差し出された手をしっかりと握っていき先生の言うことに素直に応じていました。受入れて下さったことに感謝。

そして、悩んだりしている私に対してでも厳しく指導していただいたこと今でも感謝しています。(あの頃は厳しいと感じていました。が・・)担任の先生のおおらかさも私にとっては救いでした。小学校、中学校、高校と担任の先生方と話し合いを繰り返しながら理解していただきました。本人は自分の気持ちを言葉にして伝えられないことが辛かったと思います。日頃の様子を見ながら、無理しているように感じたときは(本人は辛いと絶対に言わないので)「気持ち

を落ち着かせるためお休み」として休ませたこともありました。それも進級する度に休む回数は少なくなりました。ある時先生に「クラスの中和的なのがある」と言われたことがあります。ギスギスした感じの時に何気なく純が発した言葉で笑いが起こる。クラスがなごやかになると。

障害を告知したのは中学一年の時。それとなく感じてはいただろうけど、受入れることは大変だったろうと思います。私自身も納得するまでに時間がかかりました。今は「僕、障害者だよな」なんて話す時があります。「明るい障害者でいようね」と私は言っています。明るく前を向いてほしいから。



今思うと目の前に大きな壁を感じて、いつまで続くの？なぜ私達だけ？と思うこともありました。針を刺すような視線で見る人にも出会ったけど、この子を理解してくれる人にもたくさん巡り会えたことは幸せだったと思います。

成人式を迎える我が子には、あなたのすなおさ・やさしさ・そして笑顔。これはすばらしい財産です。あなたはたくさんいい所を持っています。これから良いところを忘れずに明るく生きていってほしいと思います。

(緒方純 母)

杜の都で考えた

並木 傑



この題名は、私の好きなある作家の本の題名をもじったものである。本物はインドに旅行し、今まで疑問に思っていたことを探求し、国民性の違いについておもしろおかしく述べており、なかなか笑えて勉強になる本なのだが、今回の私の行き先は仙台である。日頃より特に仙台について疑問を持っているわけでもなく、当然のことながら同じ日本人で国民性もそれほど変わらない為、爆笑エピソードでも旅をおし考えることは、多少なりともあった。機関紙佐啓のこのスペースを読み返すと職員は旅行に行き過ぎる気はするが嫌

がらずに読んで頂きたい。

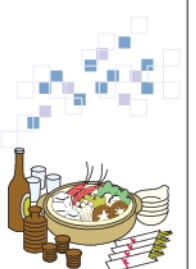
そもそもなぜ仙台なのかという今年度の職員旅行の行き先が仙台だった為である。ふる里学舎では恒例の二班に別れ、まず一班が泊し、帰ってきた翌日に二班が出発するというスタイルで私は二班であった。近年、職員旅行を実施しない会社が増えている中、ふる里学舎では理事長から新人職員まで法人のほぼ全職員が参加している。「どうせどこに行っても温泉に入って宴会をやるだけなんだから行き先を南房総にして年二回行きたい。」という宴会課長の意見は取り入れられるわけがなく、毎年福利厚生担当となった職員が理事長と相談し、一部ではなくみんなが楽しめる場所を考え、企画してくれる。ちなみに私は、旅になると周りに気をつかうことができないくらい楽しんでしまう、年二回賛成派なので未だに福利厚生の担当にはなっていない。

二班は総勢四十四名。これだけの人数なので観光地でも過ごし方は人それぞれ。幹部職員は「この建物は金が掛かっているな。」とか「あの店員のような対応を目指せ。」等、旅行をしていると頭の中からは施設運営が離れない。一方、初参加の職員は、「だからゆとり世代は。」と言われぬようにこういう場面ではどうすべきなのか、と観光よりも先輩達の一挙手一投足に必死で気を配っている。ふと、彼らは先輩達がここで『静かな湖畔』を輪唱し始めたら、不思議に思いた。ながらも続いてしまうのかなと想像し、笑ってしまった。

せてみる。整備された町並みを見て満足していたかもしれないし、あと十年早く産まれていたら天下が取れたのにと悔しがっていたのかもしれない。真相はわからないがこういう風にイメージを膨らませるのも旅ならではのロマンがある。途中、伊達武將隊という最近流行らしい鎧を着たイケメンの集団が若い女性達と写真を撮ったり握手をしたり楽しそうにしていた。当時命がけの戦をしていた武將達は、まさか将来そんな風に観光PRのネタに使われるとは思っていなかったであろう。何だかニヤニヤしている格好だけの武將が目にしたものが弾けて少し気の抜けた気分になってしまった。若い観光客を誘致する為に色々工夫しているのだから、本来持っている良い部分は壊さないでほしいものだ。



夜は、メインイベントの大宴会となる。勤務地が市原や東京、和田浦とバラバラだが、日頃から何かと顔を合わせる機会が多いのでよそよそしさは全くない。先輩は先輩にビールを注ぎに回り、その先輩は更に先輩に注ぎに回る。そして途中の余興やカラオケも欠かせないという現代の日本では絶滅間近の正真正銘のザ・宴会である。こういう雰囲気は煙たたく思ってしまう方もいるかもしれないが、ふる里学舎の職員が一致団結しているのはこの縦社会と義理人情の気持ちがあるからと個人的には思っている。



二日間というのはあっという間に過ぎ、帰り道である。旅行に行くたびに何名かファミレスでハンバーグを食べることが通例となっている。牛タンや生力キは非常に美味だが、ずっと食べ続けられるものでもない。結局はハンバーグやカレーが恋しくなってしまう。貧乏性の自分達と、意外と庶民派の理事長なのである。会話の内容は、旅行の話はほとんどにこれから仕事の話になってしまふ。来年度は大きく事業が展開する為既に多数の職員採用が決定しているとのこと。人が増えていくと雰囲気も変わり、何をしてもまとまることは難しくなるだろう。それでもふる里学舎に期待し、信頼してくれている人は絶対に裏切りたくない。その為には、こうして仕事を離れて職員同士と人間関係のいい付き合えることが仕事へのモチベーションを高めチームワークを良くするように思う。だから関係者の皆様、そんなふる里学舎の職員をこれからも温かく見守って下さい。

(支援員)

編集後記

三寒四温とは良く言ったもので寒いながらも時折春の気配を感じます。とはいえ、原稿を書いている窓の外は雪が降りしきり地面はうっすらと白くなっています。この雪がやんだら、また春が一步近づくのでしょうか。うららかな春への期待を込めて、佐啓75号をお送りします。

石渡 恵美